せまけれど宿を貸ぞやあみだ殿後生たのむとおぼしめすなよ、鷹峯にて遷化時の遺偈、

七十餘年快哉、屎臭骨頸堪作何用、咦、眞歸處作麼生、鷹峯月白風淸、

〔年山紀聞〕〔二〕隱士長流

わかき時は下河邊彥六共平と名告たり、和州宇多の產、父は小崎氏、名を忘れたり、いかなる故にか、母の氏をとなへ侍りける、もとより妻子なくして、中年より津の國難波のかたはらに隱居をしめ、靜に書をよみ、中にも歌學をこのみ、萬葉集、古今集、伊勢物語などには暗記したり、その學門おのづから傳へ聞えて、大坂の富人おほく弟子となれり、生得世にへつらはぬ人がらにて、心のおもむかぬ折は、富家の招にも應せず、訪れ來れる人にも物いはず、まくらを高して、あるひは眠り、或は書をよみ、心にまかせて過しける、西山公〇徳川光圀その才を聞しめして召けれども、終にしたがはざりしかば、紙筆をたまはりて、萬葉の註を乞たまふにも、心におもむきたる時は、一二首づゝ註して、またをこたりがちに侍しまゝ、はたさずして貞享三年丙寅六月三日、身まかり侍りぬ、六十三歳、圓珠庵の契冲師とまじはりふかゝりければ、遺稿をあつめて、晩華集と名づけたり、

〔續近世畸人傳〕〔三〕叡山源七

源七は、もと攝津國高槻の士たりしが、暴惡放埒により身をたつるに所なく、浪花に徘徊して馬卒となり、よからぬ業におきては、いたらずといふ所なし、其頃娼婦に八重といふものあり、かしくと別名せり、それ兄を害して罪せらるゝ時、其馬の口を此源七とりけるが、何んとか感悟しけん、道心おこり、妻も有けれど、大坂にとゞめて、しのびて京にのぼり、神樂岡の知福院をたのみて居たりしが、或は四國の佛閣を廻らんとおもへば、其日より暇乞て出ゆく、あるは大峯へ詣んと思へば卽まうでつ、さて其山に斷食して籠り、百日も五十日もありしことたびくにおよぶ、其後親しき人に松尾氏なるが、日枝の山に詣るに伴ひて、俄に此山信仰になり、月には十四五度も